

浮世絵でたどる東海道宿場町

二重の今昔物語

江戸の日本橋と京の三条大橋の間を結ぶ東海道は、江戸幕府が最も重視した街道です。その距離は、およそ125里(500キロメートル)。行程の途中には、53の宿駅が設けられ、参勤交代の大名一行や寺社巡礼の旅人など、多くの人々が往来しました。

江戸時代後期になると、庶民にも旅が身近な存在になりました。地誌や紀行文が刊行される中、滑稽本『東海道中膝栗毛』が大流行するなど、関心が高まってきました。

こうした中、街道を題材にした浮世絵も登場します。浮世絵は当初、美人や役者などの人物描写が主体でしたが、

天保4(1833)年から翌年の初めごろに刊行された歌川広重の保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズは、風景を主体としたのが特徴です。宿場ごとの情景や旅人の様子に加えて、四季の移ろいや雨・雪・風などの気象状況も巧みに取り入れ、旅情豊かに描き出したことで、爆発的な人気を博しました。名所絵師としての地位を確立した広重は、その後も『行書東海道』『狂歌入東海道』『隸書東海道』『豎絵東海道』などと通称される東海道シリーズを多数手がけています。

時代の「昔」、浮世絵に描かれた町は、今どのように変貌しているのか、見比べながら歩くのも楽しいものです。違った視点でたどれば、新たな魅力を発見することでしょう。

監修：三重県総合博物館
TEL 059-2228-2283

*各宿場町の各施設に関しては、休館日・開館時間・料金・受け入れ方法・人数などに違いがあり、状況に応じて休館・閉館している場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美 中村元美
撮影：……梅川紀彦 尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

蟠龍槽ぼんりゆうそうが蘇る、「七里の渡し」跡

東海道42番宿 桑名宿

【桑名市】



保永堂版「東海道五十三次之内 桑名」※ [三重県総合博物館]所蔵



外観を再現した蟠龍槽

リーズの「桑名七里渡口」で描かれていたのは、船着き場の情景。画面左側には紺碧の伊勢湾が広がり、右側には桑名城の櫓と石垣の手前に入港間近の2隻の乗合船が大きく描かれています。手前の船をよく見ると、水主みづぬしと思われる人物や乗客の姿まで細かく描写されているのがわかります。

現在、旧桑名宿周辺称された桑名城本丸と二之丸跡は「九華公園」となり、サクラ・ツツジ・ハナシヨウブなどが咲き誇ります。また、ユネスコ無形文化遺産に登録された「石取祭」で知られる桑名宗社(春日神社)など、歴史ある寺社も多かったです。かつての本陣や脇本陣跡地には料理旅館などが並び、賑わいの一端を知ることができます。

「七里の渡し」跡一



「伊勢国一の鳥居」

堤が築かれ、広重が描いた風景とは異なっています。それも、伊勢神宮遷宮のたびに内宮宇治橋の鳥居を譲り受けて建て替えられてきた「伊勢国一の鳥居」は、今も威容を誇っています。ところで、すぐ近くに浮世絵とよく似た建物に気付くでしょう。実はこの建物は「水門統合管理所」なのですが、城の隅櫓すみぐらの一つである蟠龍槽跡地に建てるにあたり、外観を往時の姿を忠実に再現したのです。蟠龍とは、天に昇る前のようにくまっていた状態の龍のこと。航海の守護神としての役割を果たしてきた櫓は、今も人々の安全を見守ってくれています。

お問い合わせ

桑名市役所産業振興部観光課
TEL 0594-241-1231

※印の写真は取材先から提供していただきました



保永堂版「東海道五十三次之内 四日市」※
「四日市市立博物館」所蔵



「納屋防災緑地公園」



三滝橋からの光景

室町時代には毎月四の付く日に市が開かれていたといわれる四日市は、宿場町であると同時に「湊町」としても発展しました。天保年間（1830～1844）の様子を示す『東海道宿村大概帳』によれば本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠は98軒ありました。しかし、保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズ「四日市三重川」で描かれているのは、とてもさびしい情景です。強風が吹く中、飛ばされた笠を必死

に追いかける旅人の姿は、実際の情景といふより、人生の厳しさを示唆した心象風景のようです。ところで、三重川とは現在の三滝川のこと、広重はこの川に架かる三滝橋からの眺めを描いたとする説がありますが、もっと下流ではないかという説を教えてください。『東海道四日市宿創生協議会』事務局長の北岡泰一さんです。具体的には、現在の「納屋防災緑地公園」内あたり。しかし、周囲一帯

は近代港湾施設としての開発が進み、面影を探すのは困難でした。一方、三滝橋から望めるのも臨海コンビナート群です。船の帆柱の代わりに煙突がそびえ立つ光景は、隔世の感がありますが、近年では「四日市コンビナート夜景クルーズ」が人気となるなど、新たな魅力となっています。江戸時代には土橋だった三滝橋の南には、問屋場がありました。問屋場とは、人足と馬の手配をする事務所のことで、本陣や高札場とともに宿場には欠かせない施設でした。現在は、モダンな外観の建物が建っています。「東海道四日市宿資料館」です。同館は「共同地区連合自治会」や「共同地区社会福祉協議会」などの地域組織と、歴史研究グループ「網の会」で結成した「東海道四日市宿創生協議会」（会長：橋本勝文・共同地区連合自治会「副会長」が整備を進め、令和元年に開館しました。館内には四日市代官所「陣屋跡から出土した陶器類や駕籠や甲冑など約300点が展示され、四日市の歴史・民俗・文化を発信し、後

世に継承していく施設としての役割を担っています。

なお、同館を訪ねたら、南へ250メートルほど進んだ先の、交差点角に立つ大きな道標も見ておきたいものです。「すぐ（真つす）江戸道」「すぐ京いせ道」の文字が太く刻まれ、裏面には指差しをした手の絵も彫られた珍しいものです。文化7（1810）年の年号が読み取れますが、実はこの道標は3代目で、立っている場所も向きも、当初とは異なっていると伺いました。さて、東海道は石薬師宿へと続きます



「東海道四日市宿資料館」



道標

が、両宿の間が2里27町（約10.7キロメートル）と距離が長かったため、中間地点にある日永が、間の宿となりました。また、ここは東海道と伊勢街道の追分（分岐点）でもあったことから、神宮参拝者など多くの人々で賑わいました。



丸清版「東海道五十三次（隸書東海道）四日市」※「四日市市立博物館」所蔵

そのため、多くの浮世絵にも描かれ、弘化4（1847）年から嘉永年間（1848～1854）に刊行された広重の丸清版「東海道五十三次 隸書東海道」も題材にしています。画面中央に伊勢街道への分岐を示す鳥居、左右に名物の饅頭を売る茶店が描かれています。また、旅人とともに、主人の代わりに神宮参拝を果たしたという「おかげ犬」も描かれています。かつて街道をまたぐように建てた鳥居周辺は「日永の追分」として整備され、今も地域の人々の心の拠り所となっています。

そのため、多くの浮世絵にも描かれ、弘化4（1847）年から嘉永年間（1848～1854）に刊行された広重の丸清版「東海道五十三次 隸書東海道」も題材にしています。画面中央に伊勢街道への分岐を示す鳥居、左右に名物の饅頭を売る茶店が描かれています。また、旅人とともに、主人の代わりに神宮参拝を果たしたという「おかげ犬」も描かれています。かつて街道をまたぐように建てた鳥居周辺は「日永の追分」として整備され、今も地域の人々の心の拠り所となっています。



「日永の追分」(具指定史跡)

お問い合わせ

四日市市教育委員会社会教育・文化財課
TEL 059-3554-8233
「四日市市立博物館」月曜日休館
TEL 059-3551-2700
「東海道四日市宿資料館」土・日曜日と祝日のみ開館
TEL 059-354-8176
TEL 090-8323-11997
(事務局 北岡泰一さん)

※印の写真は取材先から提供していただきました

東海道44番宿 石薬師宿

【鈴鹿市】

いづよりは晩秋から初冬の田園風景という風情です。



保永堂版
「東海道五十三次之内 石薬師」※
〔三重県総合博物館〕所蔵



石薬師寺の山門

東海道を行く神宮参拝者たちは、「日永の追分」で伊勢街道へ、関宿の「東の追分」からは伊勢別街道へと進むことから、両追分の間に位置する石薬師宿と隣の庄野宿は、ほかの宿場町に比べて、農村的色彩が強かったようです。

現在、石薬師寺の山門を望む位置に立つと、静かな住宅地が広がります。また、同寺の背後には国道1号が通り、間近に迫る山々を眺めることはできなくなりました。それでも山門や薬師堂は、往時の風情を十分に残しています。

保永堂版「東海道五十三次之内 石薬師」で描かれているのは、石薬師寺です。同寺の本尊は弘法大師が靈石に彫ったと伝わる薬師如来立像。古来から信仰を集め、参勤交代の際には藩主自らが参拝し、道中の安全を祈願したといわれています。なお、浮世絵では刈り取った稲藁を積んだ藁塚などが描写されていて、宿場町と

なほ、すぐ近くには蒲冠者かほのまがねのり範頼ゆかりの御曹司社がたたずみ、南側には「蒲桜」が枝を広げています。蒲冠者範頼は源頼朝の弟で、武道・学問に秀でていたとされる人物。「蒲桜」は、範頼が鞭として使っていたサクラの枝を地面に逆さに突きさしたところ、芽が出たという伝説が残



「五十三次名所図会 (絵経東海道) 石薬師」※
〔三重県総合博物館〕所蔵



「蒲桜」
(県指定天然記念物)

ります。ところが、江戸時代の人々にとつては、桜、
たとえば、義経のイメージが定着していたようです。そのため、安政2(1855)年に刊行された広重の「五十三次名所図会(絵経東海道)石薬師」の副題は「義経さくら 範頼の祠」となっています。

現在、石薬師の町を歩けば、いたるところで佐佐木信綱の歌と絵を描いた「歌額」を目にすることができるよう。ここは、歌人・佐佐木信綱の生まれ故郷。街道沿いには「佐佐木信綱資料館」などもあり、文学散歩も堪能できます。

お問い合わせ

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課
TEL 059-382-9031

※印の写真は取材先から提供していただきました

「庄野宿資料館」で知る、江戸時代の人々の暮らし

東海道45番宿 庄野宿

【鈴鹿市】

は定かではありませんが、この場所は、庄野宿から約60

0メートル北東にあった「おこん茶屋」付近ともいわれています。現在、その周辺の鈴鹿川堤防沿いに立つてみると、目の前には国道1号が通り、ひっきりなしに車が往来していました。



鈴鹿川堤防沿いからの光景



保永堂版
「東海道五十三次之内 庄野」※
〔三重県総合博物館〕所蔵

庄野の町で、ぜひ訪ねたいのが「庄野宿資料館」。かつて油問屋を営んでいた旧小林家の屋敷を改修した館内に入ると、まず目をひくのは、天和2(1688)年から慶応4(1868)年にいたる高札5枚です。人馬賃や禁制などが示してあり、当時の人々の生活の一端を知ることができます。そのほか、地域の人々手作りの本陣・脇本陣のジオラマなどを見学していると、小さな米俵に

庄野宿は、保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズの中でも傑作として知られる「白雨」の舞台です。白雨とは、昼間の激しい夕立のことで、大地を激しくたたきつける雨の暗い描写と、慌てて走り出す旅人たちの躍動感あふれる姿が見事な対比となっています。

米俵で、俵の中には、水に浸してから焙烙ほうらくで煎り、はじけた後に平



「庄野宿資料館」

「焼米俵」

同館は、町に伝わる歴史・風習・名物などを次世代へ語り継ぐ役目を果たしてくれているのです。

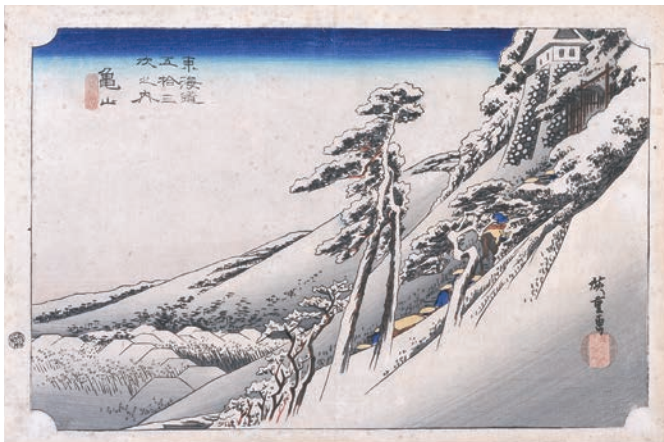
お問い合わせ

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課
TEL 059-382-9031
「庄野宿資料館」月・火・第3水曜日休館
TEL 059-370-2555



「五十三次名所図会 (狂歌入東海道) 庄野」※
〔三重県総合博物館〕所蔵

※印の写真は取材先から提供していただきました



保永堂版「東海道五十三次之内 亀山」※「三重県総合博物館」所蔵

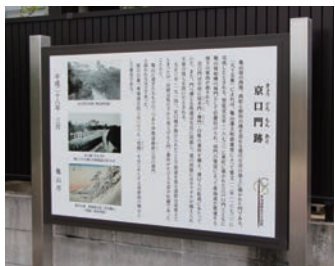
本良勝(宗憲)。中世末期に築かれていた亀山古城の城郭を母体として、天正18(1590)年に築城したと考えられています。

広重の保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズの題材も、城のある風景です。副題は「雪晴」で、前夜まで降り続いた雪が止み、晴れわたる早朝の様子を巧みに描写しています。画面右上にそびえる城壁や、左下に連なる家並み、急斜面を黙々と上つていく人や馬など、すべてが静寂に包まれています。庄野宿の「白雨」で描写された動的な世界とは全く異なり、広重の画風の幅広さがかがえます。

「雪晴」が描かれた場所は、町の西端に位置していた京口門あたりだといわれています。京方面から城下へ入る人々の監視をしていたという門は現在はありませんが、梅巖寺手前に跡地をうかがえます。

示す大きな案内板が立っています。その案内板に掲載された明治時代初めごろの写真を見ると、

坂道の先に櫓が写っています。浮世絵では坂の傾斜が誇張されているものの、情景が似ていることがわかります。京口門跡からは、かつての城下一带を散策するのをおすすめします。鍵の手状に複雑に曲がる東海道を歩けば、黒い漆喰壁と格子戸が印象的な建物に気付くでしょう。「旧館家住宅」です。同家は江戸時代末期から大正時代にかけて「枡屋」の屋号で呉服商を営んでいました。手入れが



「京口門跡」に立つ案内板

庄野宿からちょうど2里の距離に位置する亀山宿は、宿場町であると同時に城下町でもありました。町の中心となる亀山城の初代城主は、戦国武将・岡



「旧館家住宅」外観



「旧館家住宅」内部

行き届いた屋敷内を見学していると、館家の人々の息遣いが聞こえてくるようです。

亀山市の歴史的風致形成建造物に指定されている「旧館家住宅」を後にして北へ向かうと、目にも鮮やかな白壁の長屋門となまこ壁の土蔵が出迎えてくれます。ここは、「加藤家屋敷跡」。同家は江戸時代後期の亀山城主・石川家の家老職を務めていました。長屋門・土蔵以外にも主屋の一部な



「加藤家屋敷跡」の長屋門と土蔵



「加藤家屋敷跡」内部

本瓦葺きとなり、外壁は、黒い板壁から白い漆喰塗りに変わりました。石垣の下から美しい白壁の櫓を見上げると、浮世絵の世界に近付いたような気がします。「旧館家住宅」「加藤家屋敷跡」「旧亀山城多門櫓」はいず



「旧亀山城多門櫓」(県指定史跡)

れも、土・日曜日と祝日は無料公開されています。状況に応じて、地域の方が内部を丁寧に説明してくれるので、見ごたえ十分です。なお、多門櫓以外にも復原整備された城の遺構があり、間近に見ることが出来ます。亀山宿城下は、じっくりと時間をかけて散策したい町です。

お問い合わせ

亀山市文化スポーツ課
まちなみ文化財グループ
TEL 0595-96-1218

※印の写真は取材先から提供していただきました

関宿

【亀山市】



瓦屋根が美しい関宿の町並み。中央の屋根が関地蔵院。

宿場の中ほどには関宿を代表する古刹・関地蔵院があります。天平13(741)年、僧・行基が全国に流行した天然痘から人々を救うため、地蔵菩薩を彫って安置したのが始まりとされています。

時の流れが止まったかのような町並みが残る関宿。多くの旅人で賑わい、お伊勢参りのブームに沸いた江戸時代の霧囲気が味わえます。各地の宿場町が姿を変えていくなか、関宿は昭和59(1984)年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、大切に守られてきました。

保存地区は伊勢別街道に入る「東の追分」から、大和街道の始まる「西の追分」との間、約1.8キロメートルにおよび、

「東の追分」から、大和街道の始まる「西の追分」との間、約1.8キロメートルにおよび、

関宿の町屋は江戸時代後期から明治時代中頃までのものが多く、建物の並ぶ景観が見事。格子戸や虫籠窓、庇下の幕板など往時の風情が色濃く残り、昔を偲びながら歩くことができます。

関地蔵院から「東の追分」をめざすと、古風な構えの関郵便局があります。江戸時代、ここは高札場があった場所です。隣りかの高札が掲げられています。隣接する建物は宝珠の玉を象った虫籠窓が印象的な「関宿旅籠玉屋歴史資料館」。

「関で泊まるなら鶴屋か玉屋、まだも泊まるなら会津屋か」と俗語にも語われ、200人ほどが泊まれたという大旅館です。入口には講札が掛かり、帳場や土間、土蔵、離れなど建物が一体になって残され、食器や膳などの道具類の展示から、人々がどのように旅籠で過ごしたかを伺い知ることができます。



「関宿旅籠玉屋歴史資料館」の外観(右)と帳場



「伊藤本陣」を示す石柱

家屋を所有し、参勤交代の大名も宿泊したことがわかっています。保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズの「関」は、副題が「本陣早立」。参勤交代の一行が、慌ただしく出発の準備をする様子が描かれています。駕籠や笠、替え草履の入った竹籠などが用意された主



保永堂版「東海道五十三次之内 関」※「三重県総合博物館」所蔵



延命寺の山門

伝統的な町屋を公開した「関まちなみ資料館」や山車を収蔵する「関の山車会館」では、町の歴史や祭りのことが詳しく展示され

屋根の間では、出立の打ち合わせが行われ、脇には供奴が待機し、旅装を整えた供侍が表門付近で挨拶を交わしています。また箱提灯の模様は広重の「ヒロ」の字をデザインした印で、幔幕の青い定紋は御所車に広重の父方の姓「田中」の文字を圖案化し、主屋根の間に描かれた「白い(白粉)の菓 仙女香」しらが菓 美玄香は化粧品店の広告看板と、随所に広重の遊び心が見られます。現在、川北本陣の建物は残っていませんが、その門は延命寺に移築され、川北家の家紋を象った瓦が当時の威厳を保っています。



「五十三次名所図会(豎絵東海道) 関」※「三重県総合博物館」所蔵



「東の追分」の大鳥居と常夜灯

「関」に描かれた、「東の追分」の大鳥居が見えてきます。これは東海道と伊勢別街道の分岐点で伊勢神宮を遙拝するためのもの。20年に一度の神宮式年遷宮の際、内宮宇治橋南詰の鳥居が移築され、現在の大鳥居は平成27(2015)年に建て替えられました。鳥居横の大きな常夜灯には、元文5(1740)年の銘が刻まれています。

※印の写真は取材先から提供していただきました



「東海道五十三次之内 (役者見立東海道) 関 小まん」※
〔三重県総合博物館〕所蔵

もう一つ、紹介したい浮世絵が三代

歌川豊国の「東海道五十三次之内(役者見立東海道)関 小まん」です。父の仇討ちを果たした人物として知られ、「鈴鹿馬子唄」にも「関の小万」が登場します。

関郵便局の近くで立派な堂宇を構える福蔵寺は、天正11(1583)年創建。織田信長の三男・織田信孝の菩提寺として開かれたのが始まりとされていますが、



福蔵寺。向かって右側に小万の墓がある。

この寺には小万の墓があります。江戸時代中期、九州久留米藩の牧藤左衛門という藩士が、遺恨あつて同輩の小林軍太夫という者に殺されました。牧藤左衛門の妻は身重でしたが、仇討ちを志し、旅に出ます。鈴鹿峠を越え関宿に着いたところで行き倒れとなり、「山田屋(現・会津屋)」に保護されましたが、女の子を産んで後に病没。この娘が小万です。小万は母の遺志を継ぎ、亀山城下で3年程武術を修行。天明3(1783)年に仇敵、小林軍太夫を討ち果たし、その後も「山田屋」に留まりました。



福蔵寺境内にある「関の小万」碑(右)と墓

があります。愛称は公募で「小萬の湯」と決まりました。小万が今でも町の人たちに親しまれている証でしょう。同じ敷地内の日本家屋「旧木村邸」は、亀山市観光協会の休憩施設として、いずれも無料で開放されています。街道情緒に浸れる町並み歩き、参勤交代やお伊勢参りの人々で賑わった頃に想いを馳せ、一息つかれてはいかがでしょうか。



和室を解放する「旧木村邸」



足湯の「小萬の湯」

難所の鈴鹿峠を前に旅籠で栄えた

東海道48番宿 坂下宿

〔亀山市〕



保永堂版「東海道五十三次之内 阪之下」※
〔三重県総合博物館〕所蔵



大雨や大雪の日に通止めとなる鈴鹿峠の国道1号。上りと下りの専用車線が山肌にゆるやかなカーブを描いています。鈴鹿峠の麓にあるのが坂下宿。かつては東海道の難所を控え、参勤交代で大名の宿泊も多く、江戸時代後期には「松屋」「大竹屋」「梅屋」の本陣が3軒、脇本陣1軒を含む旅籠は48軒を数える東海道有

数々の宿でした。そんな旅籠が並んだ旧街道も今はひっそり。坂下宿周辺には旧小学校を活用した「鈴鹿峠自然の家」や「鈴鹿馬子唄」などを展示する「鈴鹿馬子唄会館」があり、豊かな自然を楽しめる場になっています。



〔鈴鹿馬子唄会館〕館内

坂下宿の浮世絵には筆捨山が登場します。定番の名所として知られた筆捨山は、室町期の画家・狩野法眼がこの山を描こうと筆をとり、翌日に残りを続けようとしたところ、雲や霞が立ち込め山の姿が変わってしまったため描き足せず、あきらめて筆を投げ捨てたと伝えられています。保永堂版「東海道五十三次之内」シリーズの中の「阪之下」は、実際にはない大滝が流れる筆捨山を眺める旅人が題材となっています。



片山神社

筆捨山を眺め、宿場町を歩いて国道1号の側道へ進むと、片山神社を示す石碑があります。慶安3(1650)年9月の大洪水まで、坂下宿はこの場所にありました。古くから信仰を集めた片山神社は西国の諸大名からも多額の寄進を受けていましたが、近年火災のため社殿が消失。それでも緑の中で荘厳な雰囲気漂わせています。

時代の中での繁栄と衰退の移り変わりを、垣間見ることが出来る宿場町です。

お問い合わせ

「鈴鹿馬子唄会館」
TEL 0595-96-2001
亀山市観光協会
TEL 0595-97-8877

お問い合わせ
亀山市文化スポーツ課
まちなみ文化財グループ
TEL 0595-96-1218
亀山市観光協会
TEL 0595-97-8877
「関宿旅籠玉屋歴史資料館」
TEL 0595-96-0468

※印の写真は取材先から提供していただきました

※印の写真は取材先から提供していただきました